羽昨工高新聞

第１４４号

発行所
石川県羽咋市西釜屋町
石川県立羽咋工業高校
TEL (0767) 22－1193

編集兼発行
羽咋工高生徒会新聞部

第５８回卒業式挙行

祝　卒　業

まず理解に徹し、そして理解される

校長　北野　浩和

「完訳　七つの習慣～人格主義の回復～」という本のタイトル、聞いたことがありますか。この本は、著者のスティーブン・R・コヴィーが成功者たちの共通点を観察し、その原則を「七つの習慣」としてまとめたものです。世界的名著にしてベストセラーの自己啓発本と言えます。それは次のようなものです。

前提：「人格主義」、「インサイド・アウト」で世界を見る　第一の習慣：主体的である　第二の習慣：終わりを思い描くことから始める　第三の習慣：最優先事項を優先する　第四の習慣：Win-Winを考える　第五の習慣：まず理解に徹し、そして理解される　第六の習慣：シナジーを創りだす　第七の習慣：刃を研ぐ

ここでは、全ての習慣について触れることができませんので、今回は、得るものが多いと言われる「第五の習慣」に目を向けてみます。家族や友人、同級生（同僚）との「人間関係を良くしたい」という人は本当に多いと思います。「まず理解に徹し、そして理解される」という習慣は、Win-Winの関係を築くために重要になってくるものです。

人は自分の考えや思いを相手に理解してもらおうとする際に、分かりやすく話そうと努めますが、意に反して、理解してもらえない場合も多々あります。そんな時には「なぜ理解できないのだ」などとつい思ってしまいます。しかし、私達は得てして、自分の過去の経験を相手の話に重ね合わせてしまっているのです。そのため、人の話を聞きながら、同意したり反対したり、自分の視点から質問したり、助言したりしがちになります。ただ、そうすると相手は理解されたと感じられなくなってしまい、結果として自分のことが相手に理解されることもありません。自分の考えや思いを理解してもらう原則は、まず先に、相手を理解することです。それが「第五の習慣」です。

話の聞き方の最高レベルのスキルは、「共感による傾聴」です。これは、相手を理解しようと聴くことであり、相手の身になって聴くことです。コヴィーは、これを身につけるためには、四つのステップがあると紹介しています。第一段階「相手の言葉をそのまま繰り返す」：相手の話を注意して聞くようになります。第二段階「相手の言葉を自分の言葉に置き換えて言い直す」：話の内容を考えながら聞くようになります。第三段階「相手の感情を自分の言葉で置き換えるあいづちを打つ（「つらいね」「楽しいね」など）」：相手の言葉よりも相手の感情に注意して聞くようになります。最後の第四段階「第二段階と第三段階を同時に行う」すなわち「相手の言葉を自分の言葉に置き換えると同時に、相手の気持ちも言葉にする」：この段階で初めて相手は心を開き、信頼感が生まれます。

これから皆さんは、いずれ職場や地域社会の中でおのおのに役割を担っていく事になります。職場や地域社会では何人かの単位あるいは数十人の単位で仕事をする、または、小さなチームで役割分担や連携して仕事をする場面がほとんどです。そこでは、リーダーになる場面やコミュニケーションで悩むことも多いでしょう。その時に求められるものが、自分の話を聞いてもらえる「傾聴」ができる「コミュニケーション能力」です。県内企業の経営者の多くの方が、社員に一番に求めている「コミュニケーション能力」「人間力」に他ならないと思います。

仕事やプライベートで自分の意見を尊重して欲しいと思うなら、「この人なら信用できる」「あの人に付いていこう」と思われる人になる事です。その人が「何を言ったか」でなく「どういう人物か」で判断しているのです。信頼し付いてきてもらえる人になるために必要なのは、いかに普段から相手を尊重し相手に寄り添っているか、相手の目線で世界を見ようとしているかに尽きるという事です。

羽工生の皆さんの多くは卒業後すぐに社会に出ていきますが、そのために必要な力として、七月に「今を生き抜く力『レジリエンス』」を培って欲しいといいました。今回はそれに加えて、第五の習慣「まず理解に徹し、そして理解される」、「傾聴」する力も身につけるよう努力し、成長していって欲しいと思います。社会に出たときに、人との繋がりを深くして活躍していってくれることを期待しています。

（参考文献：まんがでわかる七つの習慣　監修：フランクリン・コヴィー・ジャパン　㈱宝島社　～是非読んでみてください～）

新たな目標

教諭　坪田　美如

私は昭和五十九年に美術大学を卒業し、二十二歳で美術講師として高校に勤務しました。大学を卒業する頃になっても就職が決まらぬままで、親に呆れられながら「好きな絵を描いて彫刻を作れればそれでいい」とのん気に構えていました。講師として勤めるようになった後も長く続ける気持ちはなく、いつでもやめられるつもりでいたのに、次の年に採用されて定年の年まで教師を続けられたことが不思議に思えます。なぜやる気のなかった自分が仕事を続けてこられたのか、その理由は生徒や保護者との出会いの中で仕事の楽しさを感じるようになったからです。教師になりたてのころは生徒と年が近いこともあり、仲の良い生徒もいる一方で、意見がぶつかり口論になることもしばしばありました。今思えば自分の考えに固執し、変なプライドを持っていたのでしょう。この時期、仕事に目的を見いだせず、夏休みになると海外に一人旅をしていました。（昔は教師も夏休みあったんです。）本物の芸術作品を見る事だけを目的にした貧乏旅行でしたが、この経験が今も自分自身の考え方のベースになっています。今も一年にひとつは新しいチャレンジをすることを自分の目標に掲げています。現在はコロナの感染もあり自由が制限される時代ですが、ネットの中の与えられる情報だけでなく、自分自身が行動して心が動いた体験は創造性を生むために不可欠なものだと感じています。自分の世界を広げるためにはできるだけ本物に触れること、自分にとって初めての体験にチャレンジすることが重要だと思います。新しいものに出会おうとする意欲さえあれば世界は限りなく広がっていくはずです。

迷ってばかりでダメダメだった私が教師らしくなっていけたのは、今までかかわってくれた生徒たち、保護者の方々、先輩・同僚の先生方のおかげだと思っています。教師の仕事は人とかかわらずには成立しません。優しくて人間的な魅力にあふれた生徒たちと、羽咋工業高校で共に過ごせたことにも感謝しています。まだまだ人生は続いていきます。また新しい目標を定め、昨日の自分よりほんの少しでも成長できるよう前に進んでみたいと思います。ありがとうございました。

退職にあたり一言

教諭　福井　勉

思えば遠くへ来たもんだ…。

二十二歳で教鞭を執ることになり、「もう」そして「無事に」退職の歳を迎えることができました。「教鞭を執る」とは、ご存知の通り「教師として生徒を教える」の意ですが、こちらから教える以上にたくさんのことを生徒から学ぶことができた三十八年間でした。担任や顧問等という立場で生徒と関わる日々を過ごす中で、問題を抱える生徒たちと相見えることが何度もありました。恐縮する保護者の方々と共に生活指導について話し合い、反省足りぬ生徒本人と腹を割ってとことん話し合う経験は、間違いなく教師の糧となりました。私にとっても生徒にとってもたったの3年間でしたが、年月を隔てることにより貴重な3年間だったと思いを馳せるのは私の独り善がりでしょうか。

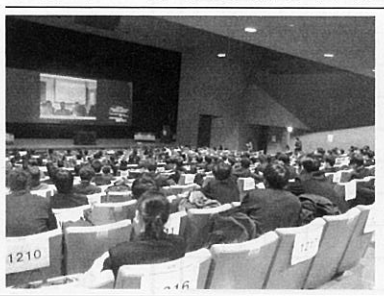
振り返ると、就職指導の中で企業の方々との交流の機会をたくさんいただけたことは、見聞を広める上でとても有意義でした。教師というかごの中から飛び出して、広い世界の一端を覗かせていただいたことには、もう「いい思い出」しかありません。責任の重さでつぶされそうになる生徒たちに、働くことの楽しさを少しでも伝えられればとの思いで様々なことを語らせていただきました。

光陰矢の如しと申しますが、ここまで来られたのも偏（ひとえ）にまわりの方々のご助力のお陰です。この場をお借りして感謝申し上げます。

思えば遠くへ来たもんだ。このさきどこまでゆくのやら。

課題研究公開発表会

令和四年一月二十九日（土）にコスモアイル羽咋を会場に、令和三年度石川県立羽咋工業高等学校課題研究公開発表会がおこなわれました。新型コロナウィルス感染対策から、本校生徒と来賓、教職員、事前申し込みの保護者のみでおこないました。外部への公開として、保護者や中学生向けのユーチューブ配信をおこないました。すべての班が一年の研究成果を発表し、一、二年生も真剣に聞き、質問をしていました。



【発表内容】

一　電子機械科・電気科
専門高校等における産学連携人材育成事業　環境に配慮した小型電気自動車製作プロジェクト

二　建設造形科（建築コース）
リノベーションしてみた

三　電気科
電気工事工法の研究

四　電子機械科
ＣＮＣ旋盤の研究

五　建設造形科（土木コース）
ものづくりコンテスト全国大会測量部門への挑戦とＵＡＶ測量

六　電気科
小水力発電機への取組と改良・測定

七　電子機械科
アメリカンフットボールロボットの製作

八　建設造形科（デザインコース）
安全な社会への第一歩～オレンジリボンとレインボーフラッグ～

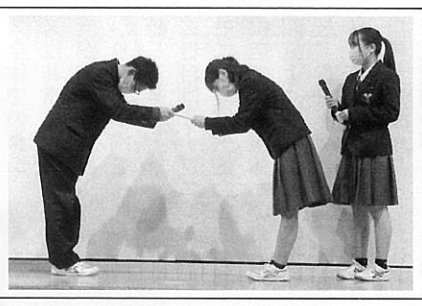
九　電気科
全国ソーラーラジコンカーコンテストin白山

十　電子機械科
全国高等学校ロボット競技大会ロボット製作

三年生を送る会

令和四年二月十日（木）に令和三年度三年生を送る会が開催されました。コロナウイルス感染対策のため、第一体育館に三年生と二年生、教室で一年生がリモート視聴をおこないました。

最初に校長先生、生徒会長から挨拶がありました。その後、在校生から三年生に卒業記念品として印鑑が贈呈されました。三年生代表の高橋光咲さんから謝辞が述べられました。その後は生徒会が企画した在校生や教職員でのダンス動画の上映、学校にまつわるクイズがおこなわれ、最後は三年生の思い出ムービーが上映されました。会場は笑いあり、思い出を懐かしむ姿があり大変いい雰囲気でおこなわれました。



校内カルタ大会

令和四年一月七日（金）に第一体育館で第五十回校内カルタ大会がおこなわれました。新型コロナウィルス感染対策で、参加人数減、応援者を限定し体育館への入場者数削減、飛沫感染対策シートの設置、マスク着用の徹底、競技の様子を各教室へのリモート中継などをおこないました。参加生徒も会話や喜びの声を我慢しながらも、白熱した戦いが続き、新年最初の行事にふさわしいすばらしい大会になりました。

結　果

一年生の部　一位13Ｈ　Ｄ
二年生の部　一位23Ｈ　Ａ
三年生の部　一位33Ｈ　Ａ